

欧州視察報告書

～ポーランド・フランス・ドイツ～

沖縄経済同友会

2019 年 11 月

主催：国際委員会

目次

I.視察団名簿.....	2
II.視察日程表《2019年11月16日（土） ～ 11月23日（土）》	3
III.視察総括	5
東川平 信雄 国際委員会委員長（株）おきぎん経済研究所 代表取締役社長）	
IV.JETRO ワルシャワ事務所によるブリーフィング	10
儀間 浩（株）おきぎんリース 代表取締役社長）	
V.駐ポーランド日本国特命全権大使 表敬訪問および夕食懇談会	14
又吉 悟（沖縄経済同友会 事務局長）	
VI.ポーランド観光地視察	18
佐久本 卓弥（沖縄経済同友会 事務局次長）	
VII.JETRO パリ事務所によるブリーフィング.....	27
我如古 正伸（第一総業株） 代表取締役社長）	
VIII.駐フランス日本国特命全権大使 表敬訪問.....	31
金城 哲（有）金功重機 常務取締役）	
IX.Station-F（ステーションエフ） 視察.....	35
照屋 保（株）りゅうぎん総合研究所 代表取締役社長）	
X.フランス観光地視察.....	39
宮里 眞子（沖縄経済同友会 事務局研究員）	
XI.エアバス・ハンブルグ工場視察	45
井口 治（全日本空輸株） 沖縄支社長）	

I.視察団名簿

NO.	職名	氏名	会社名	役職
1	代表幹事	淵辺 美紀	(株)ジェイシーシー	代表取締役会長
2	代表幹事	川上 康	(株)琉球銀行	代表取締役頭取
3	副代表幹事	東 良和	沖縄ツーリスト(株)	代表取締役会長
4	副代表幹事	山城 正保	(株)沖縄銀行	代表取締役頭取
5	副代表幹事	當銘 春夫	(株)りゅうせき	代表取締役社長
6	常任幹事 (国際委員長)	東川平 信雄	(株)おきぎん経済研究所	代表取締役社長
7	常任幹事	小林 文彦	川崎重工業(株)沖縄支社	支社長
8	常任幹事	照屋 保	(株)りゅうぎん総合研究所	代表取締役社長
9	常任幹事	仲田 一郎	ヤシマ工業(株)	代表取締役社長
10	常任幹事	前谷 哲郎	全日本空輸(株)	担当部長
11	常任幹事	池宮 力	沖縄プラント工業(株)	代表取締役社長
12	常任幹事	大嶺 克成	(株)沖電工	代表取締役社長
13	常任幹事	儀間 浩	(株)おきぎんリース	代表取締役社長
14	常任幹事	杉本 健次	(株)JTB沖縄	代表取締役 社長執行役員
15	常任幹事	中村 秀樹	琉球セメント(株)	代表取締役社長
16	会員	荒川 清朗	MRO Japan(株)	代表取締役社長
17	会員	井口 治	全日本空輸(株)	沖縄支社長
18	会員	川満 正人	(株)おきぎんジェーシービー	代表取締役社長
19	会員	我如古 正伸	第一総業(株)	代表取締役社長
20	会員	金城 哲	(有)金功重機	常務取締役
21	会員	丸橋 弘和	エアポートトレーディング(株)	代表取締役社長
22	事務局	又吉 悟	沖縄経済同友会 事務局	事務局長
23	事務局	佐久本 卓弥	沖縄経済同友会 事務局	事務局次長
24	事務局	宮里 眞子	沖縄経済同友会 事務局	事務局研究員

II.視察日程表《2019年11月16日(土) ～ 11月23日(土)》

日次	月日(曜)	地 名	現地時刻	交通機関	行 程 表	食 事
1	11/16 (土)	那 覇 空 港 那 覇 空 港 発 羽 田 空 港 着	1 9 : 0 0 2 0 : 5 5 2 3 : 1 0	ANA478	那覇空港集合 空路、羽田空港へ移動(所要:2時間15分) 羽田空港到着後、国際線ターミナルへ移動【機内泊】	夕: 機 内
2	11/17 (日)	羽 田 空 港 発 フ ラ ン ク フ ル ト 着 フ ラ ン ク フ ル ト 発 パ リ ュ ェ 着 ク ラ ク フ	0 0 : 5 0 0 5 : 2 0 0 8 : 3 0 1 0 : 0 0 1 1 : 0 0 1 1 : 3 0 1 2 : 0 0 1 3 : 0 0 1 4 : 0 0 1 4 : 3 0 1 5 : 0 0 1 8 : 3 0 21:00頃	ANA203 LH1364 専 用 車	空路、フランクフルトへ(所要:12時間30分) フランクフルト着(乗り継ぎ時間:2時間50分) フランクフルト発(所要:1時間30分) パリッェ空港着 出発 クラクフ歴史地区視察(11:30~16:30) ・繊維会館(約30分間) ・レストランにて昼食(約1時間) ・大聖堂(約1時間) ・ヴァヴェル城(約30分間)※外観のみ ・旧市街散策(約30分間) ・聖マリア教会(約30分間) レストランにて夕食 ホテル着 【シェラトン グランド クラクフ泊】	朝: 機 内 昼: レストラン 夕: レストラン
3	11/18 (月)	ク ラ ク フ オシフィエンチム ク ラ ク フ ワ ル シ ャ ワ	0 7 : 3 0 0 9 : 0 0 1 1 : 3 0 1 3 : 3 0 15:00頃 1 5 : 5 3 1 8 : 1 5 1 9 : 0 0 2 1 : 1 5	専 用 車 列車(1等)	ホテルチェックアウト、専用車にて出発 (所要時間約1時間40分) オシフィエンチム視察 ・アウシュヴィッツ博物館 ・ビルケナウ強制収容所(2箇所で計2時間30分) 昼食会場へ移動 レストランにて昼食 駅到着 列車にて首都ワルシャワへ(所要時間:3時間) ワルシャワ着後、専用車にてホテルへ移動、チェックイン レストランにて夕食 ホテル着 【ホテル プリストル泊】	朝: ホテル 昼: レストラン 夕: レストラン
4	11/19 (火)	ワ ル シ ャ ワ	0 8 : 4 5 0 9 : 0 0 1 0 : 0 0 1 0 : 1 0 1 0 : 4 0 1 0 : 5 0 1 2 : 2 0 1 2 : 3 0 1 4 : 0 0 1 4 : 1 5 1 4 : 4 5 1 5 : 0 0 1 8 : 3 0 2 1 : 0 0	専 用 車	専用車にて出発 ワルシャワ視察 ・JETRO ワルシャワ事務所(約1時間) 専用車にて移動 ・ショパンの像(約30分) 専用車にて移動 ・旧王宮(約1時間30分) 専用車にて移動 ・市内レストランにて昼食(約1時間30分) 専用車にて移動 ・聖十字架教会(約30分) 専用車にて移動 ・キュリー夫人の生家&大統領官邸(車窓) ・旧市街地広場(約1時間) 在ポーランド日本国大使公邸 表敬訪問・夕食懇親会 ホテル着 【ホテル プリストル泊】	朝: ホテル 昼: レストラン 夜: 大使公邸

5	11/20 (水)	ワルシャワ パ リ	05:00 05:30 07:20 09:55 11:00 11:30 12:30 13:00 13:30 15:00 15:45 16:00 18:45 23:00	専用車 LO331 専用車	ホテルチェックアウト、専用車にて出発 ワルシャワ・ショパン空港到着 ワルシャワ発パリへ（所要：2時間35分） パリ・シャルルドゴール空港着 空港出発 パリ市内レストランにて昼食（約1時間） レストラン出発 パリ市内視察 ・Aグループ：Station-F 視察 （欧州最大級のインキュベーション施設） ・Bグループ：パリ市内美術館視察 （約1時間30分見学予定） Aグループ・Bグループ合流し、専用車にて移動 在フランス日本国大使館 到着 在フランス日本国大使館 表敬訪問 ムーラン・ルーージュ鑑賞&ディナー ご夕食（19:00～21:00）後、 ショー（21:00～22:45）鑑賞。 ホテル着 【ザ ウェスティン パリ ヴァンドーム泊】	朝：ホテル 昼：レストラン 夕：レストラン
6	11/21 (木)	パ リ ハンブルク パ リ	06:30 07:00 08:55 10:30 11:10 11:45 12:00 12:45 13:45 15:00 15:45 18:05 19:40 20:20 21:00 23:00 頃 23:15 頃	専用車 EW7403 専用車 EW7406 専用車	専用車にて出発 パリ・シャルルドゴール空港到着 ハンブルク エアバス工場視察 パリ発、空路ハンブルクへ移動（約1時間35分） ハンブルク空港着 エアバス工場へ出発 エアバス工場到着 ブリーフィング エアバス社内食堂にてランチ エアバス A380 工場見学 工場出発 ハンブルク空港着 ハンブルク発、空路パリへ移動（約1時間35分） パリ・シャルルドゴール空港到着 専用車にて夕食会場へ移動 市内レストランにて夕食 専用車にて移動 ホテル着 【ザ ウェスティン パリ ヴァンドーム泊】	朝：ホテル 昼：レストラン 夕：レストラン
7	11/22 (金)	パ リ	09:30 10:00 11:00 11:30 13:00 13:30 14:00 15:30 16:30 19:30	専用車 ANA216	ホテルチェックアウト、専用車にて出発 パリ市内視察（10:00～15:30） ・JETRO パリ事務所（近況ブリーフィング） 専用車にて移動 ・市内レストランにてご昼食（約1時間30分） 専用車にて移動 ・Bグループ：Station-F 視察 （欧州最大級のインキュベーション施設） ・Aグループ：パリ市内美術館視察 （約1時間30分見学予定） Aグループ・Bグループ合流し、専用車にて移動 パリ・シャルルドゴール空港到着 空路、羽田空港へ移動（所要：11時間55分）	朝：ホテル 昼：レストラン 夕：機内
8	11/23 (土)	羽田空港着 羽田空港発 那覇空港着	15:25 17:15 20:00	ANA1097	羽田空港着後、入国手続き、国内線乗り継ぎへ 空路、那覇空港へ（所要時間：2時間45分） 那覇空港着	昼： 夜：—

利用航空会社 ANA：全日空／LH：ルフトハンザドイツ航空／LO：ポーランド航空／EW：ユーロウイングス

Ⅲ.視察総括

【報告者：東川平信雄 国際委員会委員長（㈱おきぎん経済研究所 代表取締役社長）】

私たち沖縄経済同友会瀧辺美紀、川上康両代表幹事を含む視察団 24 名は、令和元年 11 月 16 日から令和元年 11 月 23 日までの 8 日間の日程で、“Heart of Europe”と言われ中央ヨーロッパに位置し文化と歴史が交錯する国「ポーランド」と、西ヨーロッパに位置しワインや美食文化でも知られる“自由、平等、友愛”の国「フランス」を中心に欧州（ポーランド・フランス・ドイツ）の各事情を視察しました。

今回の視察は、国際委員会及び観光委員会、情報通信委員会、環境・エネルギー委員会、地方分権改革委員会、ひとづくり委員会の共催のもと、各委員会における先進地事例の調査研究の一環として、(1)ポーランドの中世の建築とユダヤ人の残した遺産で知られる古都クラクフ歴史地区視察、(2)オシフィエンチム視察では、「ARBEIT MACHT FREI(働けば自由になる)」と書かれた入り口に掲げられている看板と真逆のことが行われていたアウシュヴィッツ・ビルケナウ強制収容所視察に悲惨な歴史を学び、(3)Station—F 視察では、欧州最大級のインキュベーション施設の見学、(4)ドイツ（ハンブルク）エアバス工場見学では、旅客機の中では世界最大の機種でターボファン 4 発の超大型旅客機であるエアバス A380 の組み立て行程現場視察など、欧州（ポーランド・ドイツ・フランス）視察・調査を行いました。

視察初日、視察先ポーランドへは、那覇発（羽田経由）、ドイツ（フランクフルト経由）、最終目的地ポーランド（バリツェ）着「所要時間：16 時間 15 分（時差 8 時間）」の長旅となりました。

ポーランド到着日は、移動時間の都合上視察 2 日目となり空港到着後、休む間もなく視察先「クラクフ歴史地区」へ移動しました。移動中の車窓からは、広大な農園やレンガ造りの建物、民家の煙突からの煙など、変化に富んだ風景が目を楽しませてくれました。

視察先のクラクフは、かつて王国時代にポーランドの首都として繁栄した街で奇跡的に第二次世界大戦の戦災を免れ、中世時代の面影を残す旧市街地は、1978 年に世界遺産に登録され当時の姿を今に残しています。

クラクフの旧市街地では、織物会館、大聖堂、ヴァヴェル城、聖マリアなどの視察、散策を行いました。長時間歩きましたが、見どころが多く、今なお中世の雰囲気が漂っている街並みに時の静止と古き歴史の足音を感じました。



「クラクフ歴史地区」



「ヴァヴェル城内にて」

視察 3 日目は、ポーランド南部のオシフィエンチムにある第二次世界大戦中にナチスドイツがユダヤ人やポーランド人などを捕虜として強制収容し、多くの犠牲者を出したアウシュヴィッツ・ビルケナウ強制収容所の視察でした。広大な強制収容所、収容所への鉄道の引込み線、収容者から没収した靴や衣服、メガネ、鞆などを展示しており言葉にできない状況を感じ、そして歴史の「負の世界遺産」から尊い平和への思いを深く噛み締めさせられた視察でした。

視察後、当日の宿泊地ワルシャワへポーランドを南北に走る EIP 新型高速列車(クラクフ中央駅～ワルシャワ・セントラル駅)で移動しました。



「アウシュヴィッツ」



「ビルケナウ強制収容所」

視察4日目は、JETRO ワルシャワ事務所とワルシャワ市街視察でした。

JETRO ワルシャワ事務所から「ポーランドをどう見るか、ビジネス環境の現状と展望」についてブリーフィングを受けました。ポーランドは、EU 加盟後、名目 GDP の倍増、4～5%の経済成長率を維持、日系企業の進出などの経済的にもとても好調な国であることや改めてポーランドの多くの魅力を知ることができました。

JETRO ワルシャワ事務所訪問後、ワルシャワ市街視察を行いました。

ワルシャワは、ポーランドの首都であり、第 2 次世界大戦で壊滅状態になったものの、市民の力により再建され 1980 年には、ワルシャワ歴史地区として世界遺産に登録されている街です。

市街視察は、ショパンの像があるワジェンキ公園から聖十字架教会のコースを散策しました。歩道を歩くとショパンのベンチがいくつも設置されており、ベンチに付いているボタンを押すとクラシック音楽ショパンの名曲が流れる工夫がされていました。また、ショパンは、フランスにて客死しパリで墓地に埋葬されましたが、心臓だけは、聖十字架教会の柱の中に今でも静かに眠っているとのことでした。

また、旧市街広場は、石畳の広々とした広場で、歴史的な建物やお洒落なカフェが並び、沿道に馬車が走る趣のある光景を見ることができました。

それとポーランドの食事は、ピエロギ(餃子に似たもの)とゴウオンブキ(ポーランド版のロールキャベツ)を美味しくいただきました。ちなみに個人的には、ジャガイモのホクホク感と新鮮な味わいが最高の食感でした。

その日の最終日程で在ポーランド日本国大使館へ表敬訪問し、意見交換会・懇親会を行いました。日本大使館公邸にて駐ポーランド特命全権大使川田司氏より、ポーランド情勢についてブリーフィングを受けました。その後、夕食会が開かれ有意義な懇親会となりました。

視察終了と心身の満足感の中、ホテルへ向かう車窓から街並みを目に写しながらポーランドという国の癒しと感動を体を感じ、時をも忘れ最後のワルシャワの夜を堪能しながらの帰路に着きました。



「JETRO ワルシャワ事務所」



「在ポーランド日本大使公邸にて」

視察5日目は、フランス・パリ視察と在フランス日本国大使館表敬訪問のため、飛行機でワルシャワ(ショパン空港)発、パリ(シャルル・ド・ゴール空港)着で移動しました。

フランス・パリのシンボルといえば、圧倒的な認知度を誇る「エッフェル塔」、シャルル・ド・ゴール広場にそびえる英雄ナポレオンの威光を今に伝える「エトワール凱旋門」があります。

パリ到着後、視察先へ向かう途中、車窓からコンコルド広場からエトワール凱旋門 2km を結ぶ大通りで高級ブランド店やカフェ・レストランが立ち並ぶメインストリート・シャンゼリゼ通りの景観を楽しみ、憧れのパリにいる実感が湧き、思わず「Bonjour(ボンジュール)こんにちは」がでる雰囲気でした。

視察は 2 グループに分かれてパリ市内視察を行いました。A グループは、Station—F 視察へ、そこは、かつて存在した広大な旧鉄道車庫を利用してつくられた 3 万 4000 平方メートルの世界最大級のインキュベーション施設で、会員は、365 日 24 時間デスクや会議室などが使用可能で、シャワーやロッカールームまでもが用意されており、海外起業家からの注目度も高く他国からの申請者も多いとのこと。県内においても更なるイノベーション基地機能を持たせた施設に期待したいものです。B グループは、ポンピドゥーセンター国立近代美術館視察でした。近代美術の傑作が見られるパリで人気の施設で有名な芸術作品を収蔵する美術館はもちろんのこと、図書館や映画館までも併設しており、多目的に近代アートが楽しめる総合施設を堪能しました。

パリ市内視察後、在フランス日本国大使館へ表敬訪問し駐フランス日本国特命全権大使木寺昌人氏よりフランスの経済・社会状況などについてブリーフィングを受けました。

その日の夕食は、ムーラン・ルージュ鑑賞&ディナーでした。

ムーラン・ルージュとは、フランス語で赤い風車という意味で、食事やショーを楽しむことができる場所です。お店の入り口の大きな赤い風車が看板となっています。

公演で有名なダンスが、女性ダンサー達が足を高く上げスカートをまくり上げて踊る「フレンチカンカン」です。その他にも様々なショーを楽しみながらフレンチを味わうことができました。



「Station—F 視察」



「フランス大使館」

視察6日目は、ドイツ(ハンブルク)エアバス工場視察のためパリ(シャルル・ド・ゴール空港)発、ドイツ(ハンブルグ空港)着で移動しました。

エアバス工場では、組み立て中(キャビン内装)の A380 を見学することができました。

エアバス A380 は、欧州エアバス社のターボファン 4 発の超大型旅客機で、旅客機の中では世界最大級の機種です。エアバス社は、拠点 180 ヶ所へ従業員を世界から採用しており、受注も 7,525 機/年(約 9 年間)を確定していて規模の大きさ、世界への貢献度の高さを感じさせられました。

今後の沖縄県における航空関連産業クラスターの形成へ伸び代を感じることができました。



「エアバス社工場内見学」

視察7日目は、視察終了日で JETRO パリ事務所訪問、パリ市内視察でした。

JETRO パリ事務所片岡進所長より「フランスの最新政治経済動向」についてブリーフィングを受けました。

不透明感増す政治そして正念場という状況等を踏まえ最近のフランスの政治経済を理解することができました。

その後、短い時間でしたがパリ市内を視察することができました。市内視察では、フランスの豊かな歴史や文化などの魅力を至る所で触れることができ、飽きのこない時間でした。

多くの観光客で賑わうセーヌ川沿いに 2019 年 4 月の火災で大きな被害を受けたノートルダム大聖堂を見学することができました。復旧が進む姿を見て首里城と重なり、胸の痛みに耐えませんでした。首里城の早期復興を願いたいものです。

視察終了後、パリ(シャルル・ド・ゴール空港)発、羽田経由にて那覇空港着をもって全ての日程を無事終了することができました。



「JETRO パリ事務所」



「ノートルダム大聖堂」

今回の沖縄経済同友会欧州（ポーランド・フランス・ドイツ）視察も例年通りのハードな日程でしたが、頻繁に行くことがないポーランドそして多くの魅力に溢れるフランスの様々な刺激に触れることができ、大変有意義な視察でした。

また、EU におけるそれぞれの国の役割・立場・歴史、独自の取り組みについても理解を深めることができました。

今回の欧州視察は、経済同友会各委員会で取り組んでいるテーマにおいても参考にできる視察内容で十分成果へ繋げることができたものと確信しております。是非とも視察で得た知識を今後の沖縄県経済の発展に反映させていただきたいと思います。

最後に今回の欧州（ポーランド・フランス・ドイツ）視察に当たって、ご協力いただきました各視察先の皆様並びにご参加くださいました皆様へ深く感謝を申し上げまして全体総括とさせていただきます。



「エッフェル塔をバックに集合写真」

IV.JETRO ワルシャワ事務所によるブリーフィング

【報告者：儀間 浩（㈱おきぎんリース 代表取締役社長）】

1.ポーランドの概況

- ・ヨーロッパの中でも大きな国である。

面積:31 万 2,679 平方キロメートル

人口:3,843 万人(EU で 6 番目)

首都:ワルシャワ(人口 174 万人)*2017 年末時点

言語:ポーランド語

宗教:ローマ・カトリック 93% 東方正教、プロテスタントなど

2.政治概況

対外関係:2004 年 5 月 EU 加盟

政体:共和制

議会:二院制(上院 100 議席、下院 460 議席、任期 4 年)

元首:アンジェイ・ドゥダ大統領

首相:マテウシュ・モラヴィエツキ首相(2017 年 12 月 12 日～)

政権基盤:「法と正義(PIS)政権」

3.JETRO ワルシャワ事務所 清水所長 ブリーフィング

現在、ワルシャワには日本から非常に多くの方にお越しいただいております、今月も皆様を含め既に約 50 名の視察参加者の受け入れを行い、ポーランドの経済事情を説明させていただいています。

先月、JETRO 主催で、中・東欧日本産農水産物・食品輸出商談会をワルシャワで開催した。同商談会は 2 部構成で、第 1 部は日系企業とポーランド、チェコ、ルーマニアおよびモルドバなど中・東欧から招いたバイヤーとの個別マッチング、第 2 部はバイヤーに加え、ポーランドのレストラン関係者を中心に招待し、回遊型の商談を行った。

また、ポーランド航空が成田とワルシャワ間の直行便を結んでおり、飛行機の価格も以前に比べれば大分安くなり、利用しやすくなったと思われる。そのようなことからワルシャワと日本、或いはポーランドと日本の距離がとても縮まっているのではないかとと思われる。

ポーランド経済は、非常に好調である。日頃からポーランド企業の方と多く接する機会があり話を伺うと口を揃えて、「景気が良い」と話す。2004 年の EU 加盟後も、経済は右肩上がり成長しており、昨年の GDP 成長率は 5.1%と非常に高い伸びを示している。そうした中、日本企業も様々なビジネスチャンスを探している。特に JETRO 事業の柱の一つである農産物の輸出支援や、泡盛、リキュール、ウイスキーなどの日本産酒類の輸出支援、それから加工食品など、様々な地域の産品を輸出支援する中で、多くの輸出事業者と関わりがある。

他の産業でいうと、日本の自動車関連製造メーカーが進出してきており、トヨタを始め自動車部品の製造業者が生産拠点地としてポーランドを位置づけている。

もう一つ特徴的なのは、IT 分野である。ポーランド人は、IT 能力が非常に高く優秀な人材が多い。そうした人材を活用し、企業の活性化やビジネスに繋げようと、日本から IT 関連の企業が多くポーランドに進出している。ある人材派遣会社は、ポーランドの IT 人材を日本で活用する事を目指し、こちらに駐在員事務所をつくと先日発表した。今そうした動きが新たに出てきているところである。

ポーランドはヨーロッパの中でも大きな国で日本の面積の9割弱、九州と四国を除いた面積と言われている。ワルシャワの位置は少し東側にあるが、日本企業はチェコやドイツの国境辺りの西側や南西部に、多く進出している。地理的にドイツ、フランス、ほかのヨーロッパ諸国、EU 域内が近いため、ここで生産し直接ドイツの自動車メーカーに納める企業が多いようだ。

ポーランドの人口は、3,843 万人で、EU で6 番目に多い。これは重要なポイントであり、日本企業が海外でビジネスを行う上で、市場が大きく、人材も豊富であるという事で注目が高まっている。

言語はポーランド語であるが、ビジネスは英語でも可能である。

当事務所は、担当国がポーランドとエストニアとラトビア、リトアニアのバルト三国、ウクライナを担当しており、国が広く移動は大変であるが、様々な国へ行くには非常にいい立地である。ポーランドの町は非常に発展しており、観光客も多い。

当事務所の事業としては、中東欧を一つの大きな市場と捉え、ワルシャワをアクセス拠点としハブという形に位置づけ、様々な事業を展開していきたいと考えている。

政治概況については、2004 年5 月に EU に加盟し、EU のルールでビジネスができ安心である。現在、モラヴィエツキ首相の下、法と正義が政権を握って様々な取組を行っているところである。

経済規模も年々順調に伸びている。その背景に EU の構造基金の交付がある。EU 全体の経済を良くする為の資金で、ポーランドは過去2 回最も多い配分を受け、インフラ整備を中心にうまく経済発展に活用している国である。例えば鉄道や道路などのインフラを整備し、経済を発展させながら、今では自ら稼ぎを出す力を付け所得を増やしている。そうした消費が経済を支え、好循環で経済成長していると言われている。他の国と比較すると安定して経済成長しているのがポーランドである。また、ポーランドは EU に加盟してまだ時間も経っていないこと、社会主義だったことで、政府の経済運営がうまくいかず市場経済化したという経緯があり、ビジネスは民間に任せた方がうまくいくと言う考えが、基本的にある。そのような考えを持っているので、新たなビジネスが多く生まれている。

それから環境保全にも力を入れている。優しい移動交通網を作ろうと、電動スクーターの導入を始めた。そして個人が空いている時間に運転手をして、タクシーより安く人を運ぶというタクシー会社の配車アプリビジネスがある。メリット・デメリットがあるが、必要に応じて活用されている。このように IT 分野や様々な分野で、新しいビジネスが生まれている。

またポーランド経済は、一人当たりの GDP 成長率が、2005 年 8,000 ドルから 2018 年 1 万 5,430 ドルと増え、成長率が 5.1%となっている。一方で物価上昇率は、2018 年に 1.6 倍で安定している。給料が増えても物は高くなっていないことから、生活しやすい環境にある。失業率も 2005 年 17.7%から現在は 5.8%で、人を採用することが難しくなっている。EU 域内は自由に移動して労働ができるので野心的な人はドイツやイギリスに行き、高い給料を貰いこちらに送金している人も多く、統計上約 100 万人が国外に出ていると言われている。その分、人手不足が問題となっているので、ウクライナを中心とする近隣諸国から、同じく約 100 万人の人材を入れている状況である。

ポーランドの輸出先は、約3 割がドイツであり、関係が非常に深い。よってドイツ経済に陰りが見えると、ポーランド経済も大きく影響される。但し、発展途上にあるので、しばらくは良い経済

情勢が続くと見ている。

ポーランドへ進出している日系企業は、303 社である（2017 年時点）。日系企業 303 社のうち 96 社が製造業で、特に自動車メーカーが多く生産が拡大している。前年比 5.6%の増加で、現在も進出の相談があるので、年々増えている。在留邦人は 1,676 名で、主にワルシャワに 573 名、グロツワフに 186 名、クラクフに 140 名が在留している。

日本企業から見たポーランドの展望について、現在ポーランド航空の成田⇄ワルシャワ直行便が毎日運航している。直行便は非常に便利で、費用的にも安いので往復利用も多くなっている。それから、ワーキングホリデーが 2015 年夏から開始され、日本とポーランドの両方で仕事をするような交流も増えている。それから日本語学科を設置する大学が 5 校ある。そして 2019 年 2 月に日 EU・EPA が発行され、これを契機にポーランドと日本両国のそれぞれへの国の関心が高まっており、より関係は強化されていくのではないかと見ている。

それから先月 10 月 17 日に、中・東欧日本産農水産物・食品輸出商談会を行った。日本食に関心のあるポーランド人が多く参加した。現在、ワルシャワには日本食の料理屋が 200～300 店舗あるが、日本人オーナーは非常に少ない。ポーランド人が日本に行き、日本料理について修業し（或いはデュッセルドルフなどで修業し）、ワルシャワで日本料理店を開店する人が多く、ポーランド全体では 500 店舗の日本料理店があると言われている。そうした中で、日本食に対して非常に関心が高まっており、食品商談会では想定以上の成約見込みの報告があった。来年度も開催予定なので、沖縄からも食品商談会にぜひ参加して頂きたいと思う。

IT 分野について、日本企業とビジネスを行いたいというポーランド企業が非常に増えている。沖縄も IT 分野について、非常に熱心に取組をされていると承知している。エストニア、ラトビアと沖縄県が MOU を締結したときは JETRO もサポートさせて頂いたが、ポーランドにもこうした企業が多くあるので、様々なビジネスの可能性があると思う。共同してやることを模索しているので、ぜひ沖縄の皆様も機会があれば、ポーランド企業との関係をつくって頂ければと思う。

【質疑応答】

Q1・人口動向、出生率、高齢化の進捗状況はどうか？

A1・高齢化の状況は調査していないが、聞くところによると高齢化が進んでおり、出生率もあまり思わしくない。そうした中で今、子供を大切に育てる親が増え過保護になってきている。その関連で、若い人はきつい仕事にはなかなか就きたがらず、例えばレストランなどのサービス業の採用も苦戦している。

Q2・テレビを見るとアラブ系のチャンネルが多いような気がしたが、アラブ人は多いのか？

A2・アラブ系を含め様々な人種の方がいるが、やはりポーランド人がほとんどだ。1 年前より中国系の方も多く見るようになった。あと IT 分野だと思うが、インド系やアジア系の人が増えてきている。

Q3・日本のお酒の輸出支援という話があったが欧州の場合、酒税が高かったり、輸出のライセンスを取るのが難しいという話を聞くが、そのような輸出関連の手続きは、どのように行っているのか？

A3・ポーランドでもアルコールの度数によってライセンスが定められており、輸入後販売をするには複雑な手続きを経ていく必要がある。一方で今、ポーランド側にもお酒のライセンスを持ち、日本酒を輸入している業者はおり、非常に熱心に日本のお酒を入れたいと取り組んでいる。

JETRO としては、そういうバイヤーを紹介する商談会を設定して、いいビジネスパートナーを見つけて頂く事をお勧めしている。一方で貿易手続きにおいては、日本側で貿易実務講座を行いながら、どのような手続きが必要なのか情報提供をし対応している。

C1・最後に質問ではありませんが、沖縄から PR です。

先ほどの、ラトビアとエストニアの IT の MOU 締結の件ありがとうございました。締結時に、沖縄県と沖縄 IT イノベーション戦略センターが訪問したかと思う。我々沖縄経済同友会の情報通信委員長も深く関与しており、来年2月と10月には、沖縄でIT見本市を開催予定である。また宜しくご指導をお願いしたいと思います。



(JETRO ワルシャワ事務所 清水所長)



(ブリーフィング時の様子)



(集合写真)

以 上

V.駐ポーランド日本国特命全権大使 表敬訪問および夕食懇談会

【報告者：又吉 悟（沖縄経済同友会 事務局長）】

今回の視察において、平成 28 年 6 月から 2 年間、外務省沖縄担当大使であり、当会特別会員でもあった、駐ポーランド日本国特命全権大使の川田司大使に表敬訪問を行った。また川田大使のご厚意により、大使公邸での夕食懇談会に招待していただいた。夕食懇談会では、川田大使の歓迎挨拶、瀧辺代表幹事の訪問挨拶のあと、川田大使からポーランド情勢についてご説明があり、その後食事をしながら和やかに懇談が進み、ポーランド・沖縄の歴史、文化、産業、観光等について様々な意見交換が行われた。

1. 瀧辺代表幹事挨拶

川田大使は沖縄での在任期間中、沖縄のためにご尽力され、また当会の特別会員として、当会活動に多大なご協力をいただいたことにあらためて感謝申し上げます。

最近の沖縄の経済状況は、観光産業が好調であるほか、個人消費や建設関連なども堅調に推移し、景況は拡大基調にある。特に観光産業は、平成 30 年度の入域観光客数が1千万人を超え、6年連続で過去最高を更新し、ハワイと肩を並べ、追い越すほどまでに成長している。

一方で、入域観光客数が年々増加する中、那覇空港の機能拡張、大型クルーズ船に対応するバースの拡充、深刻な交通渋滞の解消、人手不足への対応など、取り組むべき課題がまだ数多くある。

また、先月、首里城の焼失という大変残念な出来事によって、沖縄全体が喪失感に包まれているが、一方で、前向きに再建に向けた動きも広がってきており、当会は県内の各経済団体と連携し、国や沖縄県とともにまさに県民一丸となって、首里城の早期再建に向けて最大限取り組んでいきたいと考えている。

沖縄は令和 4 年には復帰 50 年の節目の年を迎える。当会は、復帰 50 年以降の新たな次期沖縄振興計画への提言に向けて、「プロジェクトチーム」を発足した。単なる向こう 10 年ではなく、20 年、30 年先の沖縄のあるべき姿、目指すべき姿を見据え、提言を行いたいと考えている。

今年は、日本・ポーランド国交樹立100周年という記念すべき年であり、様々な行事が行われ、両国の関係・交流がさらに深まっている。ポーランドには、歴史、文化、世界遺産など、素晴らしい観光地としての魅力が数多くあり、今後、沖縄観光がさらに発展するためには、ポーランドから学ぶことは非常に多くある。今回の視察および本日の意見交換で得たものを沖縄に持ち帰り、ぜひ活かしていきたい。

本日このような場を設けていただいた川田大使にはあらためて感謝申し上げます。



2. 川田大使によるポーランド情勢に関する概要説明

<歴史>

ポーランドの歴史は波乱万丈である。966年にミエシュコ一世により建国(ピアスト朝)し、ヤギエウォ朝(1369～1569)、ポーランド・リトアニア共和国(1569～1795)を経る。一時バルト海から黒海、アドリア海にまたがる中世最大級の国家を築いた。

1791年5月3日、セイム(議会)で欧州初となる成文国民憲法を採択(世界で米国憲法に次いで2位)。18世紀末にロシア、プロシア、オーストリアの隣接三国に分割されたが、1918年に独立回復し、1919年には、日本とポーランドの国交を樹立した。第二次大戦ではソ連とドイツに分割占領され、大戦後はソ連圏にくみ込まれたが、1989年9月に、旧ソ連圏で最初に社会主義体制から民主化(連帯系政権の成立)した。「欧州への回帰」を目標に、1999年3月にNATO加盟、2004年5月にはEU加盟を果たした。



<政治>

1989年9月に非社会主義政権が成立して以来、大統領及び議会の自由選挙が実施され、民主主義が定着した。

2015年5月の大統領選挙でPiS(法と正義)政権のドゥダが勝利し、また同年10月総選挙でPiSが上下両院で過半数を獲得。民主化後の初の単独政権が発足した。このPiS政権は一般に右翼ポピュリズムとみられているが、最も重要な点はEU離脱-Polexitはありえない、ということである。

2019年10月の総選挙では、PiSが下院で過半数の議席を獲得し、単独政権を維持。他方、上院では過半数を失い、「ねじれ」が生じる可能性がある。

裁判所制度に関する一連の法改正では、政治介入を可能にし「法の支配」を損なうとの強い懸念を示す欧州委員会と対立。2017年12月に欧州委員会は法の支配の原則に違反するとしてEU条約7条手続きを開始した(最悪の場合、欧州理事会における議決権の停止)。

一方、第2子以降への毎月500ズロチの手当の支給など社会福祉政策を実施(2019年5月に第1子まで支給を拡大する法案が成立)し、国民に好評(支持率40%)を得ている。

今年は選挙イヤーであり、5月に欧州議会選挙、10月に総選挙、また来年は大統領選挙が控えている。

<外交・安全保障>

ロシアは依然として最大の脅威であり、米を中心としたNATO及びEUとの協力が基本である。

2030年までに国防費を対GNP比2%から2.5%に引き上げる予定である。

ポーランドは、欧州ミサイル防衛システムの重要な一翼をなし、レジコボ基地にイージスアショア基地を建設中である(2022年完成予定)。

イスカデルミサイルの正式配備(2018年2月)等のカーニングラードの軍備増強により、ロシアの脅威が顕在化しているとみる。

北朝鮮とは1948年以来、外交関係を維持している。核問題(CVID)国連決議の履行、拉致問題等については我が国の立場を支持している。

中国とは、一帯一路の鉄道が通過しているが、10対1の貿易不均衡が生じ(輸入約240億ユーロ)、ポーランド側は不満を持っており、東欧諸国17カ国と中国の枠組み(17+1)については懐疑的である。

<経済>

ポーランド経済は好調である。

2004 年の EU 加盟から GDP は倍増しており (2018 年:4,965 億ユーロ、EU 第 7 位)、4～5%の経済成長率を維持している。

経済を下支えしてきたのが EU からの補助金である。EU 基金から加盟国中最大の補助を得ており、今期 2014～2020 年は 825 億ユーロとなっている。

<日・ポーランド関係>

日本とポーランドは、負の遺産のない伝統的な友好関係であり、日本の経済界はポーランドに高い関心を持っている。

日本は、過去に福島安正情報将校、明石元次郎駐ストックホルム武官、杉原千畝在リトアニア領事、小野寺信駐ストックホルム武官等によるポーランド人スパイを通じた情報収集を行った。

これまでの両国関係について以下のものが挙げられる。

- ・1904 年 ピウスツキ (初代国家元首、建国の父) とドモフスキの訪日。
- ・1920 年～22 年 765 名のシベリアにおけるポーランド孤児救出。
- ・2002 年 天皇皇后両陛下ご訪問
- ・2013 年 安倍総理訪問
- ・2018 年 7 月 河野外務大臣訪問。
- ・2019 年 6 月 秋篠宮皇嗣同妃両殿下ご訪問。

現在、在ポーランド進出日本企業は約 300 社であり、4 万人の雇用を創出している。

文化面では、クラクフの日本美術技術博物館 (マンガ館) にある浮世絵を収集したヤシェンスキを筆頭とする日本文化愛好家が存在している。また約 4,500 名の学生が日本語を学習しており、空手の競技人口は 4 万3千人である。

本年は日・ポーランド国交樹立 100 周年であり、一層の関係強化が期待される。

3. 意見交換

夕食懇談会には、川田大使をはじめ大使夫人、田北書記官が参加され、ポーランドの歴史、文化、産業や、沖縄の好調な経済状況、観光などに関する意見交換により、沖縄の今後のさらなる発展に向け、大変参考になる貴重なご意見を伺うことができた。また大使の沖縄赴任時代の思い出話などで終始楽しく和やかに懇談が行われた。

川田大使と大使夫人のおもてなしと心配りに、さらに大使公邸の津田料理人による料理 (和食) の美味しさに視察参加者は感激し、海産物等の食材は近海産のものを仕入れているなどの話題で盛り上がり、久しぶりの和食に舌鼓を打った。

最後に川上代表幹事より川田大使をはじめ大使夫人へのお礼の挨拶があり、全員で記念撮影を行い、約 2 時間の夕食懇談会を終了した。





以 上

VI.ポーランド観光地視察

【報告者：佐久本 卓弥（沖縄経済同友会 事務局次長）】

1. クラクフ

クラクフは 11 世紀中頃から 1596 年までの約 550 年間ポーランド大国の首都として栄えた都である。ポーランド文化の中心地であるといわれ、第二次世界大戦であまり被害を受けなかったこともあり、1978 年ユネスコの世界遺産に登録されている旧市街地には、歴史的な建造物が多く残っている。クラクフはポーランドの京都と例えられる。

① 織物会館

・クラクフの歴史地区の広場に面するルネッサンス様式の壮麗な建物。長さが 100m 程度あり、1 階はお土産品店、2 階はクラクフ国立美術館になっている。

・1 階の建物内部はレトロ感がある雰囲気のある通りとなっており、伝統的な東欧の民族衣装や人形、木彫りのケースや小箱、アクセサリーを販売しているお店が建ち並んでいた。



・2 階のクラクフ国立美術館には、ポーランドの近代から現代までの画家の作品が展示されており、ポーランドの有名な絵画を堪能した。



② 大聖堂

・カトリック教会の大聖堂で、ポーランドの歴代国王の戴冠式が行われるとともに、埋葬されている場所であり、歴代の王 41 名が埋葬されている。中に入ると、礼拝堂等素晴らしい彫刻や大理石等で飾られており、幻想的な世界になっていた（内部の写真は撮影不可）。



③ 昼食

- ・クラクフの旧市街の中心にある店舗「WENTZL」にて食事。
- ・ロールキャベツがメイン



④ ヴァヴェル城

- ・16世紀まで歴代のポーランド王が住んだ旧王宮である、ゴシックルネサンス様式の城。旧王宮内には、調度品や美術品、装飾品等が展示されていた。王宮の展示では、16～17世紀の王宮を再現した豪華な部屋や王族の肖像画などが展示されており、クラクフの繁栄ぶりを感じられるものであった。



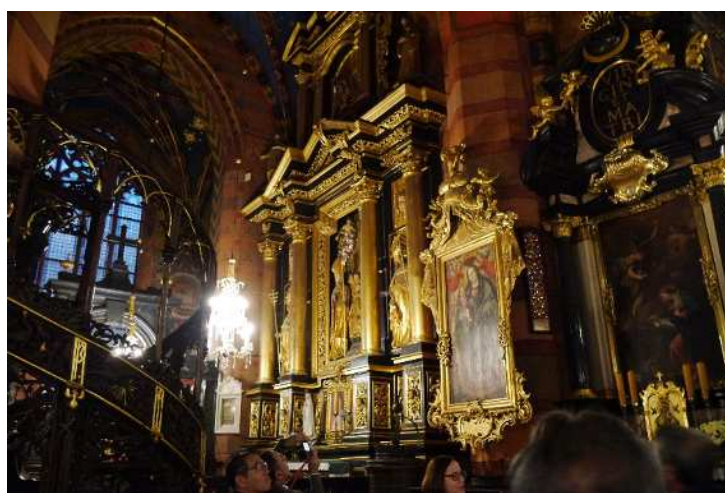
⑤ 旧市街散策

- ・第二次世界大戦で奇跡的に破壊を免れた市街地で、とても美しい中世の街並みで観光客を乗せた馬車が「カッポ、カッポ」と足音を鳴らしながら沢山走っていた。古い建物も多く、クリスマス前で、通りは飾りつけがされ始めた頃であったが、歩いて街並みを見るだけでも楽しく歴史を感じさせるものだった。



⑥ 聖マリア教会

・クラクフの中央広場に隣接するブリック・ゴシック様式の教会。教会の高さは 80m ある。教会の 2 つの高い塔の上からは、毎時間ごとにトランペットの時報（ヘイナウ・マリアツキ：聖マリアのトランペットコール）が 4 方向に向けて演奏され、私たちはクラクフに滞在している間に幾度か聞くことが出来た。ここの正午のヘイナウはポーランド全土に放送されているとのことだった。



⑦ 夕食

- ・クラクフ旧市街にあるお店「W i e r z y n e k」で食事。
- ・赤カブのボルシチとメインはタラの白ワイン煮込みを食した。
- ・ポーランドでは、なんでも（ビールも）スープにしようらしい。





2. オシフィエンチム

オシフィエンチムは、クラクフの西 54km に所にある地方都市である。この町は第二次世界大戦中、ナチス・ドイツの強制収容所「アウシュヴィッツ」があることで知られる。

① アウシュヴィッツ博物館

- ・第二次世界大戦が始まりポーランドがナチス・ドイツの支配下におかれていた 1940 年、この収容所はポーランド人の政治犯を収容するために造られたが、次第にユダヤ人やロマ、ソ連軍捕虜をも収容し、施設は拡大され一大殺人工場と化していった。

- ・戦後、当時の状態のままで保存され、博物館として公開されている。

- ・収容所入口のゲートには「ARBEIT MACHT FREI (働けば自由になる)」という文字が掲げられているが「B」の文字が上下逆さまになっており、作った被収容者のせめぎ合いの抵抗の証としてこのように作ったという説がある。

- ・収容所内には 28 棟の「囚人棟」があり、最大で 2 万 8000 人も収容されていた。

- ・見学の学生も多く来ており、第二次世界大戦中のこの収容所で行われたことを目にして、皆、表情はくもり、各自が頭の中でいろいろな事を考えている様子だった。中には、少し放心状態の感じの者もあり、皆で一緒に座っているが、言葉少なく休んでいたのが印象に残っている。

- ・号棟毎に内容を変えて展示されていた。



【4 号棟】では、当時の写真や被収容者たちの髪の毛や殺人ガスに使われたチクロンBという劇薬の缶が展示や、ガス室に関する展示があった。展示以外に印象に残ったのはガイドのエバさんから、チクロンBを製造した会社は裁判で罪に問われず、今でも残っていることは許せないと言っていたことだ。



【5号棟】では、被収容者から没収した品々（衣服、トランク、靴等）が集められて展示されていた。義足や義手などもあった。通訳のエバさんからは、被収容者に対して収容所に来るときに生活のために必要なものは全部持ってくるように言って持ってこさせとのことだ。それを、容赦なく品物等を没収し分別されたがわかる。



【6号棟】では、被収容者が施設に入るときに撮影される写真3枚の展示と、囚人番号を体に入れ墨したことの説明があった。

【11号棟】は、収容所内の刑務所で、地下には牢があり見学ができた。11号棟の横には通称「死の壁」と言われる銃殺が行われた場所があり、弾痕の後も残っていた。



【ガス室】天井に穴が開いており、そこからチクロンBを投げ入れ大量虐殺が行われた。内部に入ることができた。ガイドのエバさんの説明によると、ガス室に入れるときに被収容者に対しては、シャワーに入れる旨を告げて裸にして入れたとのことである。その後、当時の被収容者がここに入って苦しんだことを考えると、なんとも言えない気持ちになった。

・ガス室の直ぐ横には焼却炉があり、当時は1日に340人もの遺体が焼かれたという。



② ビルケナウ強制収容所

・アウシュヴィッツ強制収容所から約 2km ほど離れた所に、広大な敷地を占めているビルケナウがある。面積は 1.4 k m²、300 棟以上のバラックが並び、アウシュヴィッツよりもさらに大規模な収容所である。

・一大殺人工場で、1941 年に建設が開始され、1945 年にソ連軍によって解放されるまでに百数十万人の命が奪われた。「死の門」と呼ばれたゲートをくぐって中へ入ると、見渡す限りの草野茂った広大な敷地に、点々と木造のバラックが建っている。

・バラックによっては、内部が使用されていた当時のままに保存されているものがあり、中に入って見る事ができた。木造のベッドで大勢の収容者たちが身を寄せ合って眠ったそうだ。

・死の門をくぐって鉄道の引き込み線が真っすぐ敷地内に入り込んでいる。



③ 昼食

- ・クラクフの旧市街で「CK Dezerter」という店舗で食事。
- ・メインは「カツレツ」。ほぼ日本の「とんかつ」のようなものであった。



④ 列車で首都ワルシャワへ



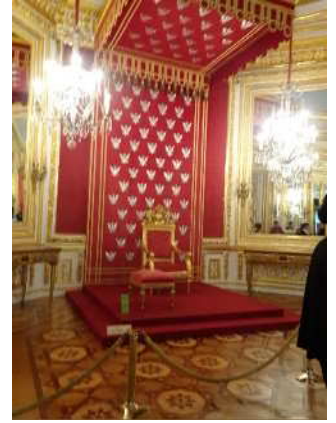
⑤ ショパンの像

- ・ショパンはポーランド出身のポーランドの前期ロマン派音楽を代表する有名なピアニスト、作曲家。
- ・ショパンの像は、ワジェンキ公園内に設置されている。夏季にはここでショパンの無料コンサートが開催されるとのことだった。
- ・ワルシャワには、いろいろな所に「ショパンのベンチ」が設置され、ボタンを押すとショパンの有名な曲が流れるものが設置されている。これはショパン生誕 200 年を記念して 2010 年に設置された (15 カ所)。



⑥ 旧王宮

- ・ここは王宮としてだけでなく国会審議が行われた場所である。
- ・1939年にはドイツによって爆撃され、1944年には爆破されている。ワルシャワの街も無茶苦茶に破壊されたが、いくつかの王宮家具や芸術作品は専門家の手により事前に国外に持ち出され避難して守られた。
- ・現在の旧王宮は再建され、ワルシャワの戦いの最中に持ち出されて隠されていた美術品等は現在戻されて展示されている。
- ・壁画、絵画、豪華な装飾、家具等は、東欧諸国だったと感じさせない立派できらびやかであった。



⑦ 夕食 (RESTAURACJA POD GIGANTAMI)



⑧ 聖十字架教会

- ・この教会も第二次世界大戦時にナチス・ドイツによって破壊されており、現在の教会は再建されたものである。教会の中の柱にショパンの心臓が安置されていることで有名で、大戦中は一時ナチスによって持ち出されたが、再建後に元の場所に戻された。ショパンの心臓は小さなツボに液体で漬けられた状態で保管されているとのことである。
- ・ショパンのお墓はフランスのパリにあるが、遺言で心臓だけは祖国ポーランドにということなのでここに安置されている。



・聖十字架協会の近くには、ショパンが住んでいた所やゆかりの地、コペルニクスの銅像等街を散策した。



⑨ キュリー夫人の生家

・キュリー夫人は、ポーランド出身の物理学者・科学者で放射線の研究で1903年のノーベル物理学賞、1911年にノーベル化学賞を受賞している。

・生家はワルシャワの新市街にあり、現在（1967年以降）はマリア・スクウォドフスカ＝キュリー博物館となっている。もともとここは学校で、学校の中で住んでいたとの説明を受けた。

⑩ 旧市街地広場

・ここもナチス・ドイツによって破壊されたが、戦後に復元されたとは思えないくらいに感じられるほど、古風な街並みになっている。中央の広場にはスケートリンクがあり、屋台も出ていた。散策の時間があつたので各自、お土産を買ったり、ぶらぶらと散歩したりして過ごした。



以 上

VII.JETRO パリ事務所によるブリーフィング

【報告者：我如古 正伸（第一総業㈱ 代表取締役社長）】

2019 年 11 月 16 日からスタートした「沖縄経済同友会 欧州視察」の最終日となる 11 月 22 日、JETRO パリ事務所片岡所長より、「フランスの最新政治経済」についてご説明いただき、意見交換会を行った。

1. JETRO パリ事務所 片岡進 事務所長 ブリーフィング

【マクロン大統領について】

- ・マクロン大統領は改革推進を当初から始め、ものすごい勢いで様々な改革をしてきたが、昨年のフランス政府への抗議活動「黄色いベスト運動」以降は、慎重に政権運営をするという方針に変えている。
- ・それまでは、反対があろうが正論でやっていた。ただ、いろいろ労使関係者や、他の利害関係者の意見を聞いて、全員が反対で一致団結しないように、うまく譲歩して、非常にきめ細やかな対応で改革を進めてきたが、それでもなかなか理解を得られなかった。
- ・そのような状況からみて、スピード感重視でやるよりは、もっと慎重に市民との対話を全面に押し出して、改革を進めるというスタンスに変わってきている。
- ・当初の支持率 45%が、黄色いベスト運動が起きた直後は 23%まで落ちたが、国民全国討論を全国各地で開催し、国民、市民と向き合い、丁寧に話を聞いたことにより、今は 30%中ほどまで回復してきて、安定運営とまでは言わないが危機は脱したということになっている。日本では 30%は決して高くないが、フランスで 30%を超えているというのは、歴代の大統領の 2 年半経った時期で見れば結構高い。
- ・マクロン大統領の印象としては、人の意見を聞かず、自分が持っている信念の下に突き進むタイプであり、本当に仕事が好きで、1 日 3 時間睡眠でいいと考えており、部下にもそのような対応を求める傾向がある。
- ・自身のブレーンは一部の信用している数人で、少数制で政権を動かしている。
- ・誤った方向にいくと、独裁、専制制度のようになるが、今のところはビジョンを持って、正しいことをしっかり行っている印象である。
- ・マクロン大統領は、国を変えるという意志はものすごく強く、しっかりとビジョンを持ち、臨機応変に対応できる能力を持っており、近年のフランスを見ていても、非常に希有な政治家家だと思う。そういう意味では、やはりフランスは今、ヨーロッパの中でも、世界の中でも注目すべき国だろうと感じている。

【年金改革について】

- ・年金保険改革は歴代フランス政権にとって、非常に難しく、これまで何度も頓挫してきた改革だが、マクロン大統領は、旗を降ろさず改革を断行しようとしている。
- ・フランスの年金制度は、一般制度と特殊制度がある。
- ・特に特殊制度は、鉄道や病院など 42 の業種ごとに年金制度があり、非常に不公平かつ年金財政が逼迫している。マクロン大統領は、42 の業界業種を全て敵に回し、既得権益を削り一般制度に統合し、全て一本化するという、非常に難しい改革をやろうとしている。
- ・1995 年にパリで、年金改革の一大デモが起き、1 カ月間交通網が全て停止し、社会が混乱した時

期があった。再び同じことが起きるかもしれないと政権は非常に慎重になっている。

- ・年金改革も当初は 2035 年頃に適用すると打ち出していたが、今の現役世代に不利益が出ると反対が出るので、最近では、今の現役世代が引退し、新しく社会に入ってくる人たちに適用して、改革の開始を遅らせ鎮静化を図ろうとしている状況である。
- ・ただ、そうすると 2065 年まで改革が行われないことになってしまい、それでは意味がないのではないかという議論もある。

【EU としてのフランス】

- ・今、ブレグジットなど、ヨーロッパは非常に混乱の渦中にあるが、マクロン大統領は、今のアメリカや中国に対抗していく上で、ヨーロッパが強くないと生き残っていけないということを言っている。
- ・このままヨーロッパが分断していくと、10 年、15 年後には、ヨーロッパという存在自体が地政学的に消滅してしまうということまで言っており、現状に対する危機感が強い。
- ・国内に限らず、国内改革の延長線上でヨーロッパも改革なくちゃいけないと強く思っており、本来必要なヨーロッパの改革に早期に取り組むため、ブレグジットの延期には、強硬に反対する姿勢を貫いている。ブレグジットに関しては、甘い態度では、離脱する国が多く出てしまう可能性があり、そうすると EU が、ばらばらになるというのがマクロン大統領の根底にある危機感であり、「離脱する場合には、それなりの犠牲を払うべき」と非常に強い姿勢で臨んでいる。
- ・ヨーロッパ強化のための改革、またそのためのフランス国内の改革の必要性という、一つのビジョンの下に行動しており、ヨーロッパ全体のことを考えている。

マクロン大統領の政権 ～正念場の2年目

➤ 当選1年前後から、政権運営の潮目が変化

➤ 大統領もそれを意識、コミュニケーション戦略を変更して、メディアへの露出を強化(2018年4月～)

➤ それでも「改革に妥協はしない姿勢」を堅持

決断が難しい問題も結論を先送りせず

- ・原子力比率50%への引き下げ時期の後ろ倒し(2017年11月)
- ・ブルターニ地方の新空港建設を断念(2018年1月)
- ・放射性廃棄物地下貯蔵施設建設予定地の反対派強制排除(2018年2月)

➤ ただし、若干の焦りも (いつまでも国民の信任は続かない)

政権は2019年春の欧州議会議員選挙までに成果を出したい、出さなければならない状況

大統領はそれでもやはりツキが回：2018年7月W杯で仏が優勝

➤ ユロ・エコロジー移行大臣の辞任(2018年8月末)

コロン内相の辞任(2018年10月)、その後内閣改造(10月)

大統領の強硬姿勢を支える2つの要因

強い政治基盤

強い野党不在
既存政党が壊滅的打撃
当面選挙予定なし

好調な経済

高い成長率 2%台の成長
失業率減少 8%台へ低下
オランド退任直後から

仏の特徴でもある広範な社会運動が起きない理由

- ・反対派の分断工作が奏功
- ・絶えず新たな改革、不満が結晶化しにくい
- ・国民の「まだ任せてみよう」との様子見の態度
- ・なによりも経済が好調

(コラム) マクロン大統領の素顔

- ・ワーホリック(一日数時間睡眠)
- ・大統領、大臣を取り巻く補佐官の疲労は極限状態に、burn out続出
- ・他人を信用しない。
- ・少数精鋭を志向(船頭多ければ船は進まない)
- ・「こんなに冷たい目をした人を見たことがない」
(社会党前書記長の書き)

(出展：JETRO パリ事務所資料より)

【原子力発電について】

- ・改革の一例として、原子力発電の比率の引き下げ時期の後ろ倒しがあげられる。現在フランスの電源構成では原子力が 75%ほど占めており、これを 50%に引き下げると以前法律で決まっております、それをいつまでにやるかが問題になっている。当初 2025 年と言われていたが、現実的には絶対無理だという年限で、ただ誰も無理だとは言わなかった。だが、マクロン大統領は無理だとはっきり言い、2035 年まで後ろ倒しをすると、公に宣言した。現時点で原子力の比率を引き下げると、逆に化石燃料の比率が増える。また、再生可能エネルギーの現下の普及状況では、気候変動に影響が出る。ヨーロッパはエコロジーへの意識が強いので、「そうであれば仕方ない」という雰囲気を出し、引き下げるところまで待つべきだというロジックで延期をした。
- ・彼の特徴的な、「先送りせず、全ての課題を解決して自分は大統領の任期を終える」という姿勢がここに現れている。

【強硬姿勢を支える 2 つの要因】

- ・私が見ていて、マクロン大統領が恵まれていると思うのは、強硬姿勢を支える二つの要因がある。
- ・その一つ、「強い政治」は日本と共通している。安倍首相も今はほかの強い野党が不在で、強い政権基盤を持っていると言われていたが、マクロン大統領も同じで、彼に対抗できる政党はいない。よって、国内政治的には反対が言えないという中で政権運営、改革ができるということは、彼が非常に強い状況にある。
- ・次に「経済が強い」ということだ。マクロン大統領は 2017 年に当選したが、このときの成長率は 2.3%に跳ね上がっている。その前は 5 年間オランドという社会党の大統領がいたが、彼のときは 1%前後のところで四苦八苦していた。それが当選した年にいきなり 2%を突破してしまう。その翌年も 1.7%。今年も 1.3%~1.4%と言われているが、これは過去 8 年間のヨーロッパの平均を初めて超えたと言われている。
- ・経済成長率だけでなく、完全失業率も下がっており、そういう意味では不満が結集しにくい経済状況になっている。失業率が高くなれば不満が出てきて、一大社会運動が起きるのがフランスの伝統だが、それが抑制されている状況で政権運営ができています。
- ・これは決してマクロン大統領が全てやったことではもちろんないが、ただ、そういう状況の中で大統領に就任し、改革を遂行できているということは、おそらく日本とは、はるかに違う状況である。そういう意味でマクロン大統領は、このような経済状況の中で改革運営ができていているということは、非常に素晴らしい。

【日本への関心】

- ・フランスの状況は、日本の「もの」に対する関心がものすごく高くなってきていることが一般的に言える。
- ・日本好きという人たちが非常に多くなっており、パリの日本食レストラン、ラーメン屋、寿司屋で、フランス人が長蛇の列で並んでいる状況である。最近驚くのは、ラーメン屋に行くと、「麺は固めをお願いします」とか「替え玉をお願いします」と、フランス人が日本語で頼んでいるという状況である。
- ・日本酒は、ものすごい勢いで普及しており、普通、他の国であれば、日本食レストランで、日本人が日本酒を出して、必死に普及させようとするが、フランスの場合は、フレンチのレストランでフランス人ソムリエが日本酒を出すという状況になってきている。まだまだ始まったばかりだが、あと 5 年、10 年するとフランスへの日本酒普及は相当なところまで行くのではないかとの印象である。

- ・実は今、日本のウイスキーは世界中で爆発的に売れているが、フランスでもものすごい人気で、日本で手に入らないものがここで手に入るということが起こっている。日本のウイスキーの普及の始まりがちょうど2010年頃だったと記憶しているが、8年、9年経ってここまで来ている。

2. 意見交換会

ブリーフィング後に、いくつかの質疑応答が行われた。

- ① フランスにおけるフレンチテック(フランス政府が注力するスタートアップ企業支援策)
- ② 原子力に関するフランスの取り組みについて
- ③ フランスにおける沖縄観光のPRの方法等について



(JETRO パリ事務所 片岡所長)



(ブリーフィングを受ける視察参加者)



(ロビーにて、集合写真)

以 上

VIII. 駐フランス日本国特命全権大使 表敬訪問

【報告者：金城 哲（㈲金功重機 常務取締役）】

1. 表敬訪問の概要

11月20日(水)、視察団一行は、駐フランス日本国特命全権大使である木寺昌人大使を表敬訪問した。

木寺大使から歓迎のご挨拶をいただいた後、刈込代表幹事から、観光産業を中心に沖縄県経済は好調であること、また2022年に沖縄は本土復帰50周年を迎え、当会が次期沖縄振興計画への提言に向け、観光をはじめ食、文化、人口減少対策などについて学ぶために今回フランスを訪問したことを紹介し、意見交換を行った。

木寺大使からは、先の首里城焼失に対するお見舞いの言葉をいただき、その後、日本と中国の関係が厳しい時代の中国大使当時の話題、故梶山静六官房長官の秘書官をされていた頃に沖縄とのご縁ができ、泡盛を好まれるようになったことなどのご紹介があった。

さらに木寺大使から、観光客数を今後増加させるためには、沖縄の持つ様々なポテンシャルを上手く若い人に繋げることの重要性や、沖縄の素晴らしい自然、海を粘り強くもっと情報発信することの必要性など、事例を含めて貴重なご意見をいただいた。

来年、沖縄本島北部などがユネスコ世界自然遺産への登録が見込まれており、今後もフランスと沖縄が芸術、芸能、空手などを通して交流を深めていくことを期待し、大変有意義な意見交換を終え、大使館を後にした。



(駐フランス日本国特命全権大使 木寺昌人大使)



2. 所感

今回初めて、沖縄経済同友会の長期視察に参加させていただいた。

トップの経営者等 24 名が参加し盛んに盛り上がり、私にとっては非常に勉強になる海外視察であった。

経営トップの方々が、iPhone や WiFi を自在に使いこなし AirDrop で写真を共有していることに、私個人としては非常に良い意味でカルチャーショックで嬉しいことであった。

1 週間ご一緒させて頂き、考え方や視点など非常に参考になった。

木寺大使は、67 歳とは思えないエネルギッシュで迫力のあるお方であった。木寺大使の前職は、2012 年に中国で特命全権大使をされていたとのこと。

2012 年といえば尖閣諸島問題で、日本、中国、台湾の対立が激化した年であり、当時、相当ハードな交渉を中国サイドと交わしたという話が印象的であった。

それでも、最悪の関係にはなりたくないというメッセージ、お互いを深く読み合い、尊重し合うという話がとても印象的であった。



■ 中国が引いた「第一列島線」「第二列島線」



フランスと日本は大変親密度が高く、様々な交流が行われており、距離も離れ違うようで実は似ている共通点がたくさんある。ここからは、共通点について、ざっくりとポイントを書いていく。

1. 平均寿命の長さ
2. 英語の下手さ
3. 美食家

個人的には我が国日本は世界最高の美食の国だと思う。フランスのミシュラン社から出版されるミシュランガイドに記載されている世界最多の国は日本である。



世界の超富裕層を沖縄に呼ぶ込むためには、弊社としても積極的に、沖縄県のレストラン・九州全区域のレストランでミシュランガイドの取得について取り組むべきだと思う。

私の検索する限りでは、沖縄にはまだミシュランのレストランはないと思われる。

4. 県の制度
5. 教育システム
6. 国の対象となる山

日本には富士山があり、フランスにはアルプス山脈にそびえ立つ神秘的なモンブランがある。

7. メートルとキログラム
8. 原子力大国
9. 外国人がマスターしにくい言語
10. 固有の文化を持つ国

- フランスはアート、バレエ、食文化モード、音楽などを固有の文化が多く、世界中からクリエイターの集まる国。
- 日本もサムライや漫画やアニメ、コスプレ、食事や伝統文化など固有で独特のものが多い。
- わが沖縄は日本、中国、東南アジアの影響を受けた日本の中でも独自の文化がある。

空手泡盛、シーサー、エイサー、琉球舞踊、三味線、紅型、組踊など。

(個人的に空手を学んでいるが、欧州は格闘技大国で武道へのリスペクトがとても高く、現在でもヨーロッパから沖縄への伝統空手の学ぶために来る欧米人が数多くいる。)

ヨーロッパは日本に比べオーガニックやエコの先進国であり、私は個人的にヨーロッパの完全オーガニックワインが好きで、東京にある最も老舗の輸入店に足を運んでいる。

2019年2月に日本とEUのEPAが発効して、欧州産ワインの関税即時撤廃などが盛り込まれた。超富裕層を沖縄に呼び込むには、そういう食材の輸入やベジタリアンやビーガンに対応するレストランなどの整備も必要だと思う。

また、フランスには、「バカンス」という長期休暇の過ごし方がある。それは現在世界中で流行している民泊と非常に相性が良く、さらに現在はITの急速な発達により、民泊・バカンス・ワーケーションというスタイルが急速に浸透していくと思う。

2019年11月民泊最大手、世界最大規模のAirbnbは今後10年間、オリンピックの最上位の公式

スポンサーになることが決定した。

日本における民泊のネガティブなイメージも払拭されていくと、期待している。

Airbnb には体験を提供するというサービスもある。今後これらを体系化して、沖縄の伝統文化の体験などを一括してサポートできるサービスやウェブサイトがあればと感じた。



以 上

IX.Station-F（ステーションエフ） 視察

【報告者：照屋 保（㈱りゅうぎん総合研究所 代表取締役社長）】



1. 名称の由来

長年、貨物駅として利用されていた建物ということから station、そして F の由来は当該施設を設計した構造エンジニア（ウージェーヌ・フレシネ）の頭文字をとったとのこと。当時（1929 年）としては珍しいプレストレストコンクリート（注 1）を使用し、薄くなめらかなアーチを描く構造は建築史上でも特筆すべきものであり、取り壊しの計画もあったが歴史的建造物に指定されて残ったようだ。

（語句の解説）

注 1 プレストレストコンクリート：通常、コンクリートは、圧縮力に対しては強いのですが、引張力に対してはとても弱いという弱点があります。それを克服するために発明されたコンクリートのひとつである。

2. 現在の仕様となった経緯

2013 年に実業家ザビエル・ニールが、当該施設を買い取った。

ザビエル・ニールは、インターネットと電話の free の創始者で、フランスにおけるスタートアップの先駆者のひとりであり、現在は世界規模でベンチャー投資を展開している実業家であり、大資産家である。ほぼ廃墟同然だった当該巨大建物を買い取り見事再生させたのだ。2014 年 11 月パリ市長が発表した再開発プロジェクト 22 か所のひとつであるパリ 13 区の一部に位置し、ロケーションも申し分ない。最近、近隣エリアに 600 人が居住できる居住他タワー 3 棟が建設されている。

3. 当該施設の飛躍的発展の経緯

2013 年始動の多岐にわたる公共政策群「フレンチ・テック」が果たした役割が大きい。特に 2015 年開設の 2 億ユーロの「アクセラレーション基金」により民間アクセラレーター（注 2）の資本増強に大きく貢献した。（民間アクセラレーターへの公的資金の是非は、各国で政策論争のテーマになっている。）

また、スタートアップに直接出資できる 2018 年 6 月開設の 4 億ユーロ「フレンチ・テック・シード」は、ディープ・テック系（注 3）のアーリーステージ（注 4）のスタートアップを強力に支援している。

加えて、スタートアップ・エコシステムの国際化（フランス国内のスタートアップの海外進出や外国のスタートアップのフランスでの活動促進支援）の進展に大きく寄与している。

Station F は、当該政策「フレンチ・テック」にうまく乗っかり 34000 平方メートルの敷地に約 1000 のスタートアップが厳しいセクションをくぐり抜け、5000 人ほどの人材が在籍するほどの飛躍的な発展を遂げている。

(語句の解説)

・注2 アクセレーター：IT の分野において、機器やソフトウェア、システムなどに追加して性能を向上させる企業等を指す。

・注3 ディープ・テック系：要素技術の中でも、将来インパクトが大きいと考えられるものをディープ・テックとして評価しようという流れです。人工知能 (AI) ・仮想 (VR) ・拡張現実 (AR) ・ドローン等の先端技術分野でも、まだ形になってなくてわかりにくい要素技術を指す。

・注4 アーリーステージ：ベンチャー企業の投資における成長ステージの区分のうち起業した直後の時期を指す。「スタートアップステージ」と呼ばれる場合もある。起業後おおよそ 2〜3 年までの時期が該当する。



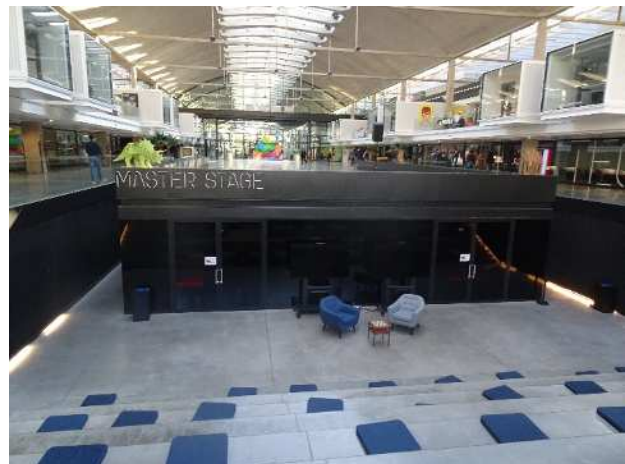
次のセクションで Station F の施設を説明していきたい

4. Station F の施設について

Station F の施設は、大きく 3 つのエリアに分かれている。

(1) 「シェア」

最初のゾーンは、オープンステージ・半地下のマスターステージなどイベントステージやパートナーとしてスタートアップたちを支援する機関が入っているゾーンである。このゾーンは予約制で一般のアクセスも可能である。支援する機関として、起業する際の法的な指導を行える政府機関やマイクロソフトやフェイスブックなどの IT の巨人やフランスの大手企業グループに加えて投資機関が入居しており、起業するまでのサポートが施設内で行える。



(2)「クリエイイト」

ここが、スタートアップたちの仕事場である。コンテナの形をしたミーティングルームのほかは全くのオープンスペースになっていて、ところどころにゲーム機やリラックスゾーンがあり、スタートアップたちの交流の場となっており、新たなアイデアが生まれるクリエイティブな場となっている。

しかしながら、入居するためには厳しいセレクションをくぐり抜けなければならない。1年間で約1万件の応募があり9%の狭き門となっている。また、フランスだけでなくアメリカ・ヨーロッパ・中国など世界各国の有望なクリエイターが集う魅力ある施設となっている。



(3)「レストランゾーン」

イタリアン・ハンバーガー・グリル・カフェテリア・バーなどがあり、それぞれ好きなものを選び好きな席で楽しめるパリでは画期的なフードコートスタイルのようだ。しかも全部で1000席という吹き抜けで緑も多くかなり新鮮な空間となっている。一般にも解放されているので、パリの食の新名所となっている。

そこでスタートアップ達、食事をしながらクリエイティブな会話を楽しみ、新たな企画や事業が生まれる空間になっているようだ。



5.視察を終えての感想

フランス政府の立ち上げた「フレンチ・テック」の目的は、スタートアップ支援のコミュニティ形成であった。具体的には、起業家やスタートアップ支援に名乗りを上げるプレーヤー（投資家・政府支援機関・民間企業・プレス等）に赤い雄鶏の使用を認め、フランスのスタートアップ・エコシステムを高度に可視化した。ロゴを使用するプレーヤーの増加に伴い、「フレンチ・テック」の知名度は、内外で高まることになった。

「フレンチ・テック」により官民一体となった施設の最も成功した事例が「Station-F」だろう。先進技術のスタートアップ企業の立ち上げでは、現行法律でカバーできない部分も想定されるが、政府の協力により、柔軟対応で進めて比較的短期間で起業出来るような仕組みが魅力となっているように思われる。

アメリカのシリコンバレーや中国の深圳地域および、去年9月に台湾視察で訪問した「工業技術研究院」等と比較して規模的には劣るもののワンストップでスタートアップが起業できる施設運営は、非常に魅力を感じた。

沖縄県におけるIT関連支援機関（IT津梁パークや沖縄ITイノベーション戦略センター）及び当会の情報通信委員会の花牟礼委員長の提唱した「ResorTech（リゾテック）」が県に認められ、更に協力に推進するためにも「station-F」の施設及び運営方法は参考になると思われる。

素晴らしい視察になりました。

以 上

X. フランス観光地視察

【報告者：宮里 眞子（沖縄経済同友会 事務局研究員）】

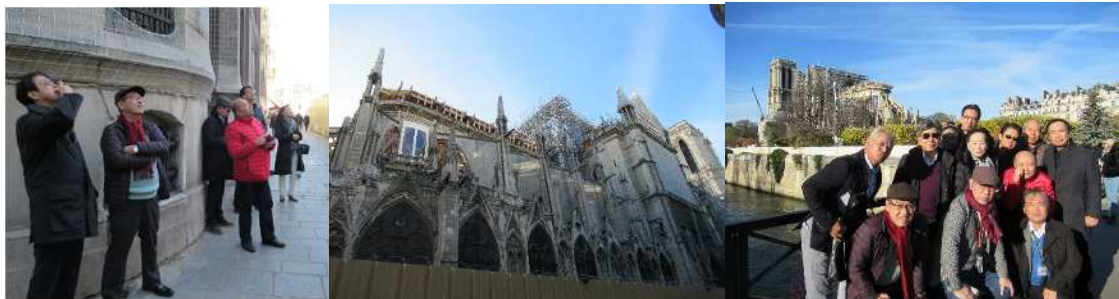
1. ノートルダム大聖堂（火災後の現状視察）



（火災後）



（火災前）



2019 年 10 月 31 日に首里城で発生した大規模火災を受け、同年 4 月に火災で屋根全体が焼失したノートルダム大聖堂の再建状況について視察を行った。

パリのシテ島にあるノートルダム大聖堂は、ゴシック建築を代表とするローマ・カトリック教会の大聖堂である。セーヌ川の近くにあることから、「パリのセーヌ河岸」という名前で周辺の文化遺産とともに 1991 年にユネスコの世界遺産に登録された。

ノートルダムとは、フランス語で「我らが貴婦人」という意味で、つまり「聖母マリア」のことを指している。貴重な歴史的建造物であり、1455 年にはジャンヌ・ダルクの復権裁判や、1804 年にナポレオン・ボナパルトが帝政を宣言した際の戴冠式（王位や帝位への就任を宣言する儀式）も行われた。

2019 年 4 月 15 日の火災後、マクロン大統領は 5 年以内で再建するとしているが、鉛汚染や崩落の危険から、現状、焼失部以外の補強対策工事だけが施工されている。

再建に関しては、伝統に忠実な復元を望む多くのフランス市民と革新的なデザインを望むマクロン大統領が対立している。

安全が確認された後、本格的な工事は 2021 年に着工する見通しで、再建にはしばらく時間を要す。世界から集まった寄付金の総額は 1,200 億円にのぼると言われている。

ノートルダム寺院の大火災

ノートルダム寺院で発生した大規模火災は、15日夕刻に火出し、瞬く間に寺院の屋根全体に広がった。炎に包まれた尖塔は崩れ落ち、その後まもなく屋根全体が崩壊した。



(出典：ロイター通信)

上記、ノートルダム大聖堂の被害状況である。赤く示された尖塔と屋根が焼失したが、ヴォールトの石の天井や2棟の塔は無事だった。バラ窓も被害を受けていないが、その上部の窓は壊れてしまった。尖塔の真下の床には、崩落した尖塔と屋根のがれきが落ちている。

沖縄では、2019年10月31日に首里城で発生した大規模火災により、首里城正殿、南北殿を含む7棟の建物が焼失した。沖縄のシンボルで、県民の心の拠りどころである首里城は、歴史的、文化的価値だけでなく、県経済を牽引する観光産業にとっても極めて重要な施設であり、その喪失は言葉では言い表せないもので、多くの人々が心を痛めている。

ノートルダム大聖堂の再建状況の視察は、首里城復興に向けて知見を深めることができた。ノートルダム大聖堂の1日も早い再建を祈るとともに、大聖堂の荘厳な鐘の音が平穏なパリの街に響きわたる日常が一刻も早く訪れるよう、心から願っている。

当会としては、首里城の早期復興に向け、県内の各経済団体と連携し、国や沖縄県とともに県民一丸となって、最大限取り組んでいきたいと考えている。

2. ポンピドゥー・センター



(ポンピドゥー・センター)



(露出する配管)

ジョルジュ・ポンピドゥー国立芸術文化センターは、(通称：ポンピドゥー・センター)は、パリ4区にあるヨーロッパ最大の近現代美術館である。1969年に、近代芸術の愛好家でもあったジョルジュ・ポンピドゥー大統領が、首都パリの中心部に造形芸術のほか、デザイン、音楽、映画関連の施設および図書館を含む近現代芸術拠点を設ける構想を発表し、1977年にヴァレリー・ジスカルール・デスタン大統領により落成式が行われた。

当初は、美術館外観のデザインが斬新であったため、歴史ある建物が立ち並ぶパリの美観を損ねるなどの批判があったが、設計を手掛けた建築家のレンゾ・ピアノは「いかめしい文化施設のイメージを破壊したかった。これは芸術と人間のこの上なく自由な関係の夢であり、同時に、街の息吹が感じられる場である」と語った。外観の特徴としては、設備や配管がカラフルに露出している。斬新なデザイン且つ展示のある内部のスペースを広く確保する役割を持っている。(配管カラーコード…「青：空調」、「緑：水道」、「黄・橙：電気」、「赤：階段、エスカレーター、エレベーターの機械室とシャフト」、「白：構造体、大きな空調」、「銀：階段・エレベータの構造体」)

当美術館は、主に公共情報図書館(仏式1階から3階)、国立近代美術館・産業創造センター(4階から6階)、映画館、多目的ホール、会議室、アトリエ・ブランクーシ、カンディンスキー図書館および国立音響音楽研究所(IRCAM)により構成される。

展示作品は、ピカソ、カンディンスキー、マティス、シャガール、レジェ、ミロ、ダリ、デュビュッフエ、ウォーホル、モンドリアン、ニキ・ド・サンファルなどをはじめとする10万点以上の作品を所蔵し、近現代美術のコレクションとしては欧州最大、世界的にもニューヨーク近代美術館(MoMA)に次いで第二の規模である。

2016年の来館者数は、美術館と図書館だけでも330万人以上に達した。2010年、当美術館の分館としてポンピドゥー・センター・メスが開館した。設計は、日本人建築家の坂茂、フランス人建築家ジャン・ド・ガスティヌ、英国人建築家フィリップ・グムチジャンが共同で手がけた。



ジョアン・ミロ「青 II」(1941年)



(マティス「黒猫を抱く少女」(1910年))



(ピカソ「アルルカン」(1923年))



(ブルトン「アンドレ・ブルトンのアトリエ」)



(マルセル・デュシャン「泉」(1917年))



(美術館の頂上からは、エッフェル塔やノートルダム大聖堂など、素晴らしいパリの町が広がっていた)



(シャガール「エッフェル塔の花嫁、花婿」前にて集合写真)

3. ムーラン・ルージュ



観光大国であるフランスの世界レベルのナイトコンテンツについて学ぶべく、130年の歴史を持つ「ムーラン・ルージュ(Moulin Rouge)」の鑑賞を行った。ムーラン・ルージュは、パリ北部のモンマルトルに位置し、映画にもなったキャバレーである。フランス語で「赤い風車」という意味を持つムーラン・ルージュはその名前の通りに、大きな赤い風車がシンボルになっている。1日2回ショーがあり、食事を楽しみながら、様々なショーを鑑賞することができる。ディナーは値段の手頃な順に「ミスタンゲット」、「トゥールズ・ロートレック」、「ベルエポック」の3種類がある。全席800席(1000 m²)の劇場で、ドレスコードが定められており、会場内の撮影は禁止となっている。

ムーラン・ルージュは、1890年代初頭、「ベルエポック (パリが繁栄した時代・文化)」の幕開けとともに誕生した。夜のとぼりが降りるころ、シンボルの赤い風車に灯がともり、店はフランスの画家「ロートレック」の絵の世界そのままのノスタルジックな雰囲気を漂わせる。

第一次世界大戦や第二次世界大戦下でも営業を続け、第二次世界大戦中にパリがドイツ軍の占領下に置かれた際も、多くのドイツ軍将兵で賑わった。ここで活躍した著名なミュージシャンは、エルビス・プレスリーや、フランク・シナトラなど多数いる。

現在、上演中のショーは「Feerie (フェリ)」で、フランス語で「妖精・魔法・おとぎの国・夢の世界」の意味を持つ。拍手喝采の中、幕が開けると、ラインストーンで飾られた衣装を身にまとった80名からなるアーティストと踊り子たちの一座が登場した。オリジナルの音楽、華麗な振り付け、幻想的なセットとともに繰り広げられるFeerieは5つのシーンで構成されており、瞬きするのを忘れてしまうほど圧巻なショーであった。



(会場内の様子)



(ムーラン・ルージュ前にて集合写真)

以 上

XI.エアバス・ハンブルグ工場視察

【報告者：井口 治（全日本空輸(株) 沖縄支社長）】

世界の航空機製造メーカーといえば、アメリカでは「ボーイング」、ヨーロッパでは「エアバス」が2強であろうか。エアバスの製造工場は、フランスのトゥールーズと、ドイツ北部のハンブルグの2拠点で生産を展開している。今回の視察では、滞在地がパリであったがドイツのハンブルグ工場まで航空機で足を延ばし日帰りの視察を行った。当初、日帰りで国を跨ぐ強行策に閉口するメンバーもいなくは無かったが、終わってみれば盛況でドイツで束の間の視察を楽しんでパリに戻ってきた。

（１）工場概要

MR. Gunn総務Directorから冒頭20分程度の工場概要の説明を伺った。

●航空機運航のフリースペース

2012年当時、航空機運航はヨーロッパ、アメリカ、アジアの一部に集中し、アジア・太平洋に「フリースペース」があった。その後、アジア・太平洋エリアの航空機需要は凄く成長してきている。



●航空・宇宙産業の将来

航空機を利用する需要はこの15年間で約36億人まで伸びたが、まだ全人口の約10%程度の利用でしかない。各国の経済発展に伴って、今後は更に伸びると予測している。

2037年まで航空産業は、平均して年率4.4%成長し37,400機の航空機需要がある見込み（更新需要：新規需要、5：5）。このうちエアバス社としては、50%のシェアを取り込みたい。

●エアバス社の体制

エアバスでは、ヘリコプター、航空機、宇宙防衛の3分野に分かれており、ハンブルグ工場は民間航空機のみを生産し全体の売り上げの7割を担っている。また、今から9年先分の約7,500機を受注している。

エアバス社は、多様性を重視しイノベーションや変革を期待しており、世界100か国以上の国から社員を採用している。このハンブルグでも80か国以上のスタッフを雇用している。

●世界中でのサポート体制

全世界で 6500 人以上のスタッフが、カスタマーサポート＆サービスを展開している。アジアでは、東京、北京、シンガポール、ドバイなどにサポートセンターがある。

●エアバス機の運航

これまで受注は19,340機（うち12,000機はデリバリー済）、25,000機が毎日世界中の空を運航しており、1.4秒毎に離発着している計算になる。

●エアバス機の特徴

<座席数>

①シングルボディ（1本通路）A320～A220シリーズ（100席～180席）

②ワイドボディ（2本通路）A380～A330シリーズ（200席～850席）

*ANAのA380は、3クラスで構成され520席仕様

<コックピット>

機種移行の訓練を最小限に抑える為に、全機種共通のコンセプトにしている（それでも10日間程度の移行訓練は必要）。

<客室>

エアバスでは、ここハンブルグ工場が客室組立の場所である。最新鋭機320NeoのYクラス・シート幅は45cmと、他社よりも2.5インチ（6.3cm）広くしている。

<環境面>

50年前と比較すると、

二酸化炭素Co2・・・80%、窒素酸化物NOx・・・90%、騒音Noise・・・75%レベルまで改善。

●民間機工場（4工場ともにドイツ北部に集中）

①ハンブルグ工場工員：約14,000人（最終組立、キャビンの設計・組立）

②ブレーメン工場工員：約2,800人（フラップ、翼などの取り付け）

③シュターデ工場工員：約2,000人（尾翼、カーボンファイバー）

④ブクステフーデ工場工員：約400人（キャビン内電子システム）

ハンブルグ工場は A320～380 までの最終組立、テストフライト、航空会社への最終デリバリーを担当している。主に A320 機の組立が多く、月間 63 機生産のうちハンブルグで約 30 機 + α を製造している。残りの約 30 機は、フランス、中国、米国で分担している。



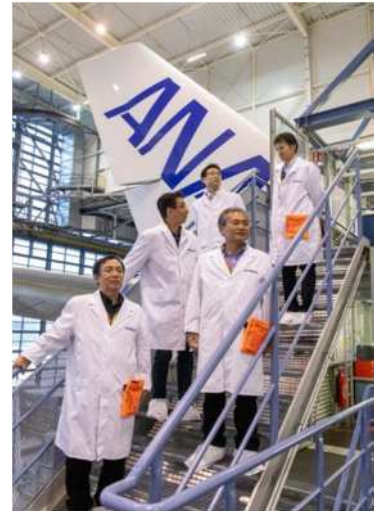
注：ハンブルグ工場の脇には、エルベ川が流れており、胴体部分を船に乗せフランスまで搬送する

（２）工場内視察

●A380の製造

＊注：パリ滞在にも関わらず隣国ドイツのハンブルグ工場まで足を伸ばしたのも、ANA向けのA380機3号機がここハンブルグ工場で最終組立（客室設備の取り付け、塗装）を実施しているからでもあった。

A380機は炭素繊維強化プラスチック製で出来ており、緑色に塗装された状態でフランスのトゥールーズ工場から空輸されてきていた（右下の写真は、尾翼だけANA塗装がされているが、左の写真の胴体は緑色の状態）。



通常このハンブルグ工場で製造された胴体部は、工場の横を流れるエルベ川を經由し海路でフランスに運ばれた後、港から陸路でトゥールーズ工場まで運ばれ最終組立が行なわれる（各地の工場で作られたパーツを寄せ集めて）。そして最終組立が終わったA380機は自ら飛行して、ドイツのここハンブルグ工場へ移動し、ここで客室装備や最終塗装が行なわれる。今回、ANA向け「フライング・ホヌ」の3号機が視察できたのは、この段階である。

●380機の特徴

<エンジン>

ANAのA380機は、ロールスロイスのエンジンを使用。他には、GEとP&Wの合併会社エンジン・アライアンス社のエンジンがチョイスできる。A380機以外の機種では、最近の傾向としてエンジンも予めセット販売される傾向にある。

<主翼の大きさ>

翼の付け根にあたるR2ドアから外に出ると主翼が伸びており、その大きさをやテニスコート？は少し大げさかも知れないが、インパクトは十分である。

付けの翼から先端にかけて丸みを帯びているが、揚力を得る為の構造になっている。実際のフライトでは、先端に向かって反り返る状態になる。

ハワイにANAのA380で行かれる際は、窓側から是非ご確認を頂ければ。





(座席取り付け作業中に機内視察
手前に足だけ見えるのが作業員)



(3点ジャッキアップで赤いカバーをした車輪が浮いている状態)



(最後に全員でANAのA380機の前で)

以 上